

馬の話あれこれ(その四)

1. 馬と人を結ぶもの

馬を操作するなかでの馬具の中には、銜・鞍・鐙がある。馬具ではないが蹄につける蹄鉄がある。

銜については、騎乗者の意思を的確に伝えるものであり、人類始めの家畜された馬を馴致し自由自在に乗りこなすことができるようになった。銜は今から 4 千年程前黒海沿岸で発見された骨製の銜が一番古いと言われているが、それ以前から各地方で木製、革製のものが実用されていた。

特に中国大陸における銜の発展は殷の時代には青銅、後漢になると鉄製になり、吾国の古墳から出土する埴輪の馬に付いている銜をみると、大陸の影響が長く続いていたことがわかる。

馬の口の中に含ませる部分が銜で、手綱で結ぶ金具の一式を轡と称しているが古典馬術書では銜と轡の区別が曖昧である。

鞍の利用は、銜の利用に対してかなり遅れており、馬の背中に何も敷かず裸馬に乗っていた。

鞍の起源は古代ギリシャの軍人であり歴史家でもあるクセノフォンによると、古代アッシリア・ギリシャ・ペルシャのレリーフ、壺絵に見られるように紀元前ペルシャ人によって発明され、前後の安定を図るため芯などに木、骨など加えるようになり、今日の鞍の原型が作られ、サルマタイ人により各地方に普及されたとする説が有力である。敷物は布、毛布が始まりで、フェルト・革などに替わるのは極く最近のことである。

馬以外でも驢馬・駱駝・象などの鞍、牛の駄載用、ヤク・トナカイなど風土に根差した独自に発展した数多くの鞍が使用されています。

古墳の埴輪の馬は、中国伝来の古代鞍であり中世にかけて吾国独自の発展を見ます。7 世紀に入って藤の木古墳出土の鞍金具にみられるように前輪と後輪が居木に対して垂直に屹立した鞍が使用されていた。

奈良時代になると中国の「唐の鞍」の影響を受けて鞍の形態は後輪が後方に傾斜した「後輪傾斜鞍」が現れる。

正倉院所蔵の鞍でみられるように、前輪、後輪の周線が覆輪状で前輪、後輪の外側が平面に近く居木は 4 枚、又は幅広の 2 枚居木であります。

平安後期、鎌倉時代初期になると前輪、後輪の馬膚側が厚く山形頂部が薄く造られ、木地の厚い部分と薄い部分の境界が稜線で区切られるようになり居木は全体に重厚で大鎧を着て騎乗する造りになりました。又、平安時代後期頃から「唐鞍」と「和鞍」に分化し、前者は儀式用に後者は水干を着て乗る鞍で、犬追物や流鏝馬などの騎射などに用いる「水干鞍」に別れる。

鞍の総高を 4 分して 1 分が山の高さであり馬銜の寸法は軍陣鞍と比べると低いものである。この水干鞍は甲冑を着て乗る戦場での「軍陣鞍」に更に分かれていった。

軍陣鞍は、鞍の総高を3分して1分が山の高さであり、山の高さと同馬銜（鞍の前輪、後輪が夫々馬の背に当たる爪と爪の間）が狭くなっている。

鞍と同時に古墳時代末期の埴輪から鐙のついた馬が見られます。平安・鎌倉時代になると騎馬戦に便利のように鐙の先端部分の足を乗せる部分「踏込」が大きくなり長くなってきます。

昭和15年頃、相模川に架かる馬入橋鉄橋の下流付近で砂利採取船の作業中に「舌長鐙」が発見されました。この鐙は平塚市立博物館2階に常時展示されており、大きさ、形状そっくりな鐙は、御嶽神社奉納品畠山重忠の大鐙と一緒に東京国立博物館所蔵品と現在3個残っているのみであります。

この鐙は高さ25cm、長さ35cmの鉄製で馬上での運動性や安定性を重視した武家中心に使われました。

鐙の上部は、居木から下げられた力革に取り付ける絞具（バックル）になっています。鐙は極めて実用的な道具で消耗が激しい上、消耗した場合でも鉄の材料として再利用されたとみられています。

武蔵国での生産が多かったため「武蔵鐙」とも呼ばれて、各地に普及されました。

相馬野馬追を唄った相馬地方の民謡「相馬流れ山」は各武者の出陣式に唄われる一節に「武蔵鐙に紫手綱、乗せて見せたい若殿を～」とある。現在使用されている畑作業の鍬、鋤鍬に似ているように思えてならない。

江戸期になると、軍馬の実戦に参加する機会もなくなり、鞍、鐙の装飾的な面に関心が移り、武蔵鐙、加賀鐙と呼ばれるに至った。

2. J R A 競馬場の左廻り・右廻り

東京・中京競馬場が左廻り、札幌・函館・福島・新潟・中山・京都・阪神・小倉競馬場は原則右廻りである。

英国ダービーのエプリム競馬場は左廻り、凱旋門賞が開催される仏国のセンシャン競馬場は右廻りである。米国の場合陸上競技場と同じ左廻りである。

3. 歩様の右利きと左利き

馬に右利きと左利きがあるかどうか、競走馬では、右廻りを得意にする馬と、左廻りのコースを得手とする馬がいると言われていています。右手前の駈歩、左手前の駈歩を得意とする馬がいる。右手前で左に曲わろうとする右前肢が常に前方に位置しているので、転倒の危険大である。蹴り癖のある馬で、蹴るときに使う後肢の頻度が右か左で多い方が、右利き左利きと区別していると言われるが、本当かしらと首をかしげている。

（常足）は、左後肢→左前肢→右後肢→右前肢、（速足）は、左後肢・右前肢→右後肢・左前肢と（駈足）は、左後肢→右後肢・左前肢→右前肢、ギャロップ（襲歩）は、左後肢→右後肢→左前肢→右前肢と後肢を最初に使って地面を蹴り、歩幅を稼ぐ走り方である。

最後の蹴り肢が右前肢になる走り方を「右手前」逆のパターンを「左手前」という。

人間が片手で荷物を持つときに時々持ち替えて腕の疲れを防ぐのと同じく馬もレース中に「手前」を換えることもあれば、騎手の指示によることもある。「手前」変換の上手下手は速く走るための技術である。障害飛越競技では経路通過にスムーズに「手前」を換えることが肝要である。

「手前変換」を苦手にしてきたのが引退前のオグリキャップであった。90年秋2戦続けて惨敗、12月引退レースとなる有馬記念を前に武豊騎手等によるトレーニングでスムーズな「手前変換」を

なしとげ見事優勝して引退の花道を飾った話は有名である。

4. 競馬の勝負服

競馬場の緑色のターフと色鮮やかな騎手の勝負服は競馬の魅力の一つである。この騎手達の姿に様々なルールがあります。派手な勝負服は馬を判別するため、レース中の最高速度 80 Km弱で集団で走り抜ける時、似た毛色の馬が多いので、決勝点審判、実況のアナウンサー等が注視し、瞬時に馬を見分けるためであります。

ヘルメットは枠に合わせ 1 = 白、2 = 黒、3 = 赤、4 = 青、5 = 黄、6 = 緑、7 = 橙、8 = 桃色のカバーで覆われていますが、同じ枠に 2, 3 頭入ることもありその場合勝負服で判定する。服は馬主毎に決め中央競馬会に登録します。服色に使用できる色は赤、桃、黄、緑、青、水、紫、薄紫、茶、えび茶、鼠、黒、白の 13 色であります。

服色に使用できるデザインは、輪（胴、袖の黄線）、一文字（胴、袖の一本輪）、帯（胴下部の横線）、山形（山形、菱山形、鋸歯形の輪又は帯）、たすき、縦縞、格子縞、天禄、ダイヤモンド、鱗、井桁縞、玉あられ、星散らし、蛇の目、銭形散らしなど概ね 34 服登録されている。服の素材は絹が使われていましたが、最近は伸縮性に富んだ素材が多い。

地方競馬の馬が中央競馬で走る例も最近増えてます。この場合胴体部分を縦横 4 分割した帽子と同じ色を対角線状に配色した「貸服」を使用する。又、同馬主の馬が同枠に入った場合には馬番号の遅い方の騎手が白を枠色の染め分けの帽子を被ることになる。

ユニークな勝負服として話題になったのは去る 1984 年のジャパンカップに参戦した豪州馬ストロベリーロード（7 着であった）は緑黄カンガルー、赤ボクシンググラブであった。豪州のシンボル、カンガルーがファイテングポーズの絵柄であったという。

5. 高等馬場馬術 「ピアップェ」

障害飛越競技は、馬の瞬発力を前面に押し出す技術であるが馬場馬術はこの瞬発力を内に秘めた技術であります。

騎乗者の体重の移動と騎坐（鞍に密着した大腿部と尻）と脚（膝から踵まで）の扶助により馬に前進の合図を送り続ける。手綱を緩めると馬は前進するが、その時手綱を控え、きっちりと馬の銜を受けさせる停止の合図を同時に与えると、前後の扶助により馬の体を極度に緊張させる。馬は乗り手の脚により左右から挟まれているから、緊張により蓄えられた力は上方へ発散する状態になる。後躯が十分に踏み込み、鼻梁が垂直になるまで頸が弓なりに湾曲（屈撓くっとう）して前駆の負担が軽減される時収縮された馬術の極め「ピアップェ」＝「足踏み運動」である。別名「収縮運動」ともいう。馬銜に掛かる力は、騎乗者のこぶしの操作により騎坐と脚の 3 種類の扶助の微妙な組み合わせにより馬に様々な動作をさせる。騎乗者の意のまま馬が動作するためには、人馬の信頼関係が成り立っている事、生き物同士の説明できない微妙な馬と人とのコミュニケーションに他ならない。

熟練者は、馬に定まった扶助を教え込み、未熟者は適切な時期に的確な扶助を馬から教えて貰うのである。

6. 蹄鉄

馬具とは言えないが、現在の馬に欠かすことのできない物である。

紀元前4～3世紀頃初めて登場したのではないかとする説が有力である。蹄鉄が装着される習慣が出来上がったのは、それから600年以上もたった中世の10世紀頃である。釘を使う技術は欧州から東方へは長い間全く伝達されなかった。13世紀のモンゴル騎馬軍団は、動物の革で保護し替馬を伴った小型騎馬の大軍である。欧州諸国の大型馬の蹄鉄にも関心なく、中国に於いても蹄鉄の技術も知識もなかった。吾国でも武田勝頼率いる騎馬隊は布か藁で編んだ「馬沓」を履いていた。長途の戦には多くの替馬を連れて行ったのである。

明治維新後に始めて現在の装蹄技術が始まった。馬の蹄は1ヵ月に約8ミリ伸びるため、3週間に1回はこれを削り新しい蹄鉄に付け替える。自然放牧の馬は伸びる長さや摩滅がよくなるバランスが良い。蹄は蹄鉄によって守護されており、この鉄を確かりと蹄に締め付けて馬体の一部にしているのが釘である。1本の釘が如何に大切であることか、「蹄無ければ、馬無し」どんな立派な馬でも蹄が駄目なら馬ではない。

7. ゼッケンの由来

「広辞林」にはスポーツ選手や競走馬が付ける番号を書いた布、又その番号とある。

主に陸上競技、スキー競技、競馬などで使われている。英語ではナンバークロスである。イタリアのベネチアで発行された「ZECCHINO」とリラ金貨の意匠が良く服装に飾り付けるのが流行した。この「ゼッキノ」は服装の装飾品に付けやすい点から競馬、スキー選手等の番号布として用いられたのが始まりと言う。

吾国の明治初期横浜根岸競馬場でドイツ人がレース前に、騎手に鞍と番号布を手渡す時「ゼッケ」（独語で布）と言ったのを日本人には「ゼッケン」と聞こえ、以来「ゼッケン」と使われたと言う説が有力である。（オリンピック余聞集より）

8. 大坪流馬術

大坪流は小笠原流・八条流・内藤流と並ぶ吾国4大古流馬術の一つとして足利義満以降江戸時代の将軍や諸藩の支持を得て頗る盛行した和式馬術最大の流派である。

開祖の大坪慶秀は、上総の人で馭馬に秀で鞍鐙の製作にも長じていた。応安（1368年～75年）頃足利義満、義持の馬術の師範となった。出生地の鹿嶋に因んで「鹿嶋三郎慶秀」と名乗り、「鹿嶋流」と称していたが永禄年間（1558年～69年）に三河国岡崎大坪郷を賜りそこに移住して「大坪式部大輔慶秀」と改名、その後剃髪して「道禅」と号した。

「小笠原殿を師として、高麗目録馬芸を伝授・・・。」と一派を成すまでは小笠原信濃守政長（1319年～65年）について馬術を磨いている。

室町時代初期の村上加賀守永幸、室町時代中期斎藤備前守芳蓮などの優秀な継承者を輩出し、江戸時代に全国諸藩に広がった。

室町時代後期、佐々木京太夫義賢の「佐々木流」、上田但馬守義秀の「上田流」、荒木志摩守元清の「荒木流」などの新流が生まれた。中でも斎藤主税定易（1657年～1744年）は「大坪本流武馬必用」を始め多くの馬術書を著した。正年2年（1429年）から文久2年（1862年）まで年代不明を

数えて2千冊（写本を含む）あると言われている。その後の大坪流は支流を生み出した。

土佐藩大坪重則、会津、富山藩の小原俊周、伊勢亀山藩の今井兼任などの「大坪新流」、丹波篠山藩矢野建房の「大坪新流軍馬」などがある。

慶秀の言葉に「鞍上に人なく、鞍下に馬なし」、「己れを正しうして馬を咎めず」と残しており現在の馬術にも……。 (継承されているので一部披露した。)

現代馬術十訓の第十項に「人として人に非ず、馬にして馬に非ず、渾一体となって靈動する是れ馬術の達人なり」、又第一項に「馬術家たらん者は己を尽くして馬を咎めず、吾が技倆の足らざるを尋ねるべし」とある。

9. 小笠原流馬術

小笠原流とは武家故実（弓馬故実）、弓術・馬術・礼法の流派、又兵法・煎茶道・茶道・礼儀作法の流派として知名度の高い流派であるが、「小笠原流弓馬故実書」によると様々な癖馬の矯正、作法の説明、専用庭（馬場）での基本的歩調訓練、敵に攻撃をかけた後、避けたりする九十九折りなど馬体の柔軟性と実戦騎馬戦の習熟の技法など絵と共に伝授されている。

最後に、江戸時代以前は、馬に乗る時には必ず沓を履き、弓を持ったと「貞丈雑記」にある。

馬上沓（物射沓）と言ひ半長靴状の立拳のある靴で鐙の絞具頭で脛が擦れるため脛巾や立拳のある馬上沓が必要であった。

弓を神聖なものとする考えは古代・中世にわたりあらゆる宇宙観、宗教観に取り込まれている。この世に害をなす生き物、ありとあらゆる物を弓矢の内に納めるとしている。この弓を引けば神仏も加護を与え悪鬼魔障を平らげ、国を安んずる事が出来るとする弓馬術道の奥の深さに驚嘆している。

馬の話あれこれも、馬齢を重ねて4年になりました。昨今は専ら口頭馬術でありますので、この辺でおしまいとさせていただきます。ありがとうございました。(完)